

チームワーク重視でインドネシア進出



株式会社 伊藤製作所

EMIDAS会員番号 72592

- 主要三品目
 - ・順送り金型設計
 - ・順送り金型製作
 - ・順送りプレス加工/冷間鍛造

〒512-8061
三重県四日市市広永町101番地
TEL：0593-64-7111 F A X：0593-64-6410
E-mail：info@itoseisakusyo.co.jp
代表者：代表取締役 伊藤澄夫
URL：http://www.itoseisakusho.co.jp/
従業員：103人 創業：1945年12月 資本金：5,000万円

フィリピン人のスタッフと川崎副社長
(左からJAYSONさん(プレス、金型保全)、JOENさん(金型設計)、川崎副社長、LARRYさん(金型仕上、組付け)、NINOさん(CAM、NC加工))

株式会社伊藤製作所は2013年11月、インドネシア・ジャカルタ近郊で業務を開始した。「インドネシア進出は全く考えていなかった」というなかでの決断だった。

伊藤製作所は本社従業員100名程度の会社だが、売上高は33億円(2014年3月期)である。1996年にマニラに進出し、2003年には経済特区であるカメルレイⅡに新築移転した。多くの顧客に恵まれ、現在は従業員125名、売上高も順調に伸びている。伊藤社長の20年以上前からの持論は、「中小製造業の海外進出にあたり、反日の国では決して成功はしない」というものだ。金型製作の教育には7年以上要する。反日を教育する国、ジョブホッピングの定着している国での金型製作は不可能に等しいのだ。

昨年のジャカルタ進出のきっかけとなったのは、現地の財閥、メカル・アルマダ・ジャヤ(MAJ)の「ARMADAグループ」との出会いだった。ARMADAの会

長は最高の条件をもって、合併での進出を提案してきた。「でもうちは中小製造業だし、ニカ国に工場を立ち上げるのは人材的にも資金的にも不可能だと考えていた」と伊藤社長は振り返る。それでもARMADA会長の再三に渡る誘いを無下には断れず、進出検討に入った。しかし日本本社は多忙を極め、駐在を送ることは不可能な状態。そこで思いついたのが、フィリピン人技術者の派遣だった。

今回のインドネシア進出のカギは、フィリピン人スタッフである。現インドネシア駐在の川崎副社長は「なんの縁故もない国で上げがでるのは優秀なフィリピン人スタッフのおかげ」と語る。立ち上げには、日本人スタッフ1名とフィリピン人4名が携わった。フィリピン工場のエンジニアが立ち上げに参加することで英語を主言語とし、言葉の障壁が殆ど無く、技術移転が極めてスムーズに進んだ。また、それにより初期の教育費用が大幅に軽減された。フィリピン人の技術スタッフは、伊藤製作所の中堅技術者と比較しても引けを取らない。川崎副社長は「設計力に関しても、日本並みです」と評価する。今後はISO/TS16949の取得をめざし、しばらくは品質・工場管理など、フィリピン人が行う予定だ。

2014年8月には新事務所開設記念式典が開催された。川崎副社長は「金型作

りで大切なのはチームワーク。日本人、フィリピン人、インドネシア人が家族のように付き合っ て チームワークを作り、将来はインドネシアで一番の順送り金型のメーカーを目指しましょう」と挨拶を述べた。社員数100人以下の中小製造業であっても、海外との連携が必要な時代になったことを実感した瞬間である。川崎副社長がインドネシア人に語った夢は、今、日本人が忘れていている夢でもある。

現在、インドネシアの自動車の生産台数は120万台だが、次の10年で倍増が予想されている。成長期のなか、伊藤製作所はフィリピン、インドネシアの工場立ち上げを通じ、順送り金型でインドネシアの合理化、コストダウンに貢献するという夢を拡大し続けている。フィリピン人、インドネシア人、そして日本人。3カ国の社員が見事に結束したチームワークをつくる伊藤製作所の今後の発展が楽しみでならない。



川崎副社長がテレビ取材を受けた「エキサイト・アジア(アジアで頑張る日本人)」が、NHK・BS1で12月頃放送される予定です。



インドネシア事務所